

釧路市教育委員会 令和2年第28回11月定例会会議録

- 1 日時：令和2年11月25日（水）13時30分から15時15分まで
- 2 会場：釧路市教育委員会室
- 3 出席者  
岡部義孝教育長  
（教育委員）  
山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員  
（事務局）  
大坪学校教育部長、津田生涯学習部長、大山教育指導参事、  
江縁学校教育部次長、高嶋学校教育部次長、工藤生涯学習部次長、  
及川総務課長、久保給食担当主幹、富田総括指導主事、  
森教育調整主幹、澤口生涯学習課長、佐藤博物館長、  
中村動物園長、牧野阿寒生涯学習課長
- 4 議事録署名人 山口委員、松尾委員
- 5 傍聴人数 0人
- 6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 大館市視察研修結果について
- (2) G I G Aスクール構想実現に係る校内研修の実施について
- (3) ネーミングライツの募集結果について
- (4) 学校の現状について

## 【公開案件】 報告事項

### (1) 大館市視察研修結果について

#### (池指導主事)

釧路市において積年の課題となっている中学校の低学力の問題について、全国的に高い学力水準を維持している秋田県大館市の教育を学ぶため、令和2年10月20日(火)より4泊5日の日程で、視察に行かせていただいた。

本視察には、岡部教育長以下、釧路市基礎学力検証改善委員会のメンバーである、景雲中学校の国語科教員1名と、大楽毛中学校の数学科科教員1名、学力担当指導主事の4名が赴いたところである。

学び合う授業と、「ふるさとキャリア教育」を軸とした「おおだて型学力」を掲げ、「一人たりとも置き去りにしない教育体制」を構築する大館市では、就学前から高等教育までの全ての教育機関が、共感的・協働的な未来大館市民を育てるという共通の目標に向かって、取り組んでいた。

また、全6校で国語科、算数・数学科の授業を見せていただいた。見事にすべての学校において、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」(おおだて型授業)が実践されており、真剣に学び合いを深める児童生徒の姿があった。

本視察を終え、大館で学んだことをどのように釧路市において教職員に還元し、新しい取組を進めるかということについては、例えば、研修機会の更なる充実と学校教育指導の回数増で、釧路市の教職員の指導力を丁寧に把握し、授業改善の方策をさらに個人レベルで提供することや、釧路市版の授業スタンダード(教師版、児童・生徒版)を作成し実行していくこと、または大館市において制度化されている、授業マイスター制度等を研究しながら、釧路市においてどのようなことが実現できるのか検討していく。今後もスピード感を持って、検討、実行してまいりたい。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

#### (岡部教育長)

大館市での取り組みのいくつかはすぐに釧路市においても実行できるだろうと思う。大館市の高橋教育長もここまでの10年間は大館市の挑戦であり、10年続けてここまで来たとのことであった。できることがあったら言ってくださいとおっしゃっていただいたので、早速、来年度改めて講師として来ていただくことの内諾を得たところである。

#### (山口委員)

視察に行かれた先生が受けた刺激を他の先生方に広げ活性化していくのが重要であると思う。これからの期待したい。

大館市の「主体的・対話的で深い学び」というのは、班単位の学びが充実しており、指導できるリーダーがいて、班の子ども達に声をかけながらお互いに学びあうことが定着してい

ると聞いた。私が初任の昭和50年代初めの頃は、班のリーダーが他の子ども達に指導、助言、刺激するというと班単位の学習活動に積極的であったと記憶している。そのような取り組みが形を変えて、大館市において大きな成果を上げているのかと思うがどうか。

(大山教育指導参事)

私達位の年代の指導では子ども達同士で話し合いをすることが多くあったが、その後総合的な学習が導入されるなどがあり、班単位での指導方法が北海道では途切れてしまったのだと思う。もう一度、授業展開の構築をしていかなければならないし、釧路市ではどのような授業を創っていくかが重要である。

(山口委員)

全く無から始めるということではないので、過去あった財産を掘り起しながら使えるものは参考にしてほしい。

(種村委員)

大館市は10年かけて取り組んできたとのことだが、10年前はどのような状態であったのか。例えば学力はどのような状況だったのか。

(池指導主事)

高橋教育長にお伺いした中では、学力について10年前は小学校、中学校共に秋田県でも平均よりも下であったとのことであった。加えて、人口の流出が多く、大館市に住み続けたという子ども達が減っていけば市自体が無くなってしまいうのではという状況であったというお話であった。それをなんとかしなくてはという思いから、おおだて型教育を構築されていった。人材や教育の中身など様々な苦労があったとのことだが、現在は秋田県において1、2を争う学力の高さにまでなっている。

(種村委員)

釧路市においても同じような状況だと思う。子ども達が釧路市を出た後、地元に戻って来ない。もし教育の力で改善されるのであれば、意味合いもとても大きいと思う。実際に大館市の人口の減少に対しての影響はあったのか。

(池指導主事)

いただいた資料によると、地元に残って仕事に就きたい、または地元を出ても戻ってくるという人口が微増ではあるが増えているとのことであった。

(種村委員)

小学校と中学校との指導の違いについてはどうか。中学校になると特に数学に対して力をつけてあげられない傾向が強いと思う。

(池指導主事)

大館市のお話をさせていただくと、どこで授業を見ても学び合いが非常に充実している。30人学級を実現しており、上位の子も低位の子も同じ空間の中で教え合い、納得いくまで学び合う姿が小学校でも中学校でもどの授業でも見られた。それが学ぶ楽しさや意味に結びついており、家庭学習も当たり前にするということに釧路市との差があると感じている。

(岡部教育長)

付け加えると、先生方の教科担任制なので別教科だと関わらないという対応が大館市においては全くない。数学の先生であっても国語の学習指導要領を読み込み、自分の守備範囲でない教科の指導に口を出すという環境が釧路市の中学校とはまるで違うのだろうと思う。

(山口委員)

釧路市に限らず中学校では教科の壁というものがあり、同じテーマで研修を深める際に障害となっている。大館市ではそのようなものがないというが、なぜ壁が無くなったのか、どのような手立てを取ったのか。釧路市の実態はどうか。

(池指導主事)

釧路市において数学に限っては、幣舞中で特に進んでいるかと思うが、少人数で特に理解できず困っている生徒に付いている先生がその時は理科の先生であり、空いている時間に助けに入っているとのことであった。加配ではなく、学校内で工夫しながら子ども達の学びを進めようとしていた。他にも景雲中、桜が丘中あたりでは教科の壁をできるだけ無くすため他の教科を少しでも先に勉強して研修に臨もうとされており、他の学校にもそのようなやり方を広めたい。大館市では、小学校と中学校の両方の経験のある先生を増やしているとお話の中にあり、今後、難しいとは思いますが釧路市の中でも進めていければと思っている。

(山口委員)

釧路市においても各学校の努力、市教委の働きかけ、適切な指導・助言によって少しずつ良い方向に行きつつあると言えるか。

(大山教育指導参事)

頑張っている学校は確かにあるがそれが全体に広がるのに何年かかるか勝負である。素晴らしい取り組みをしている学校の紹介はずっとしているが、それを自分の学校に持ち込んで経営改善をしようとしていただかなくては揃っていかない。そこを重点的に進めることで、課題の解決に近づくとと思う。

(松尾委員)

学力だけではなく、総合的な人間力も重要であるとは思う。

子ども達が自主的に勉強しようとなるまで先生のチャレンジだと思う。焦らずに進めて欲しい。

(小出委員)

大館市において「何のために学ぶのか、どうして授業を受けるのか」ということを常に児童生徒に投げかけているのか。

(池指導主事)

大館市では現在、学力よりどちらかといえば「大館ふるさとキャリア教育」の方を大きな軸としている。百花繚乱作戦の名前で各学校がテーマを持ち、例えばひまわりを育て、油を採取し、市内のお店で売り、修学旅行の資金を作ることを大人も協力しながらテーマの達成を目指す取り組みがある。子ども達はテーマの達成に必要な学びを意識しながら、学びに向かっている。学ぶ意義・意味を児童・生徒と先生に共有されていると感じた。

(小出委員)

次男が現在中学校3年生であるが、先日の学校からのお便りで 何のために学ぶのか考え受験に臨もうとあった。ただ、今の中3はそれを自分で考える経験がないと思うので、大館市との違いは何だろうと思った。

大館市は色々な事業の経験があつてだと思ふが、「自分にはよいところがあると思う」と感じる子ども達の割合が高く、釧路市との違いは何なのかというところも気になる。

(池指導主事)

先ほどお話した「大館ふるさとキャリア教育」の中で、子ども達は社会との繋がりの中で学校生活を送っていることをわかっている。家族だけでなく、地域の人からも褒められたり、認められている。学校教育の改革によって 町が元気になり、子ども達が宝になっている。子ども達は人から感謝されたり、励まされている経験が多く自己肯定感が上がった。確かに今の釧路市にはそのような経験が少ないと思う。受験のためだけでなく、その先にどんな人生があるのかしっかり考えられる教育がなされていけば、自己肯定感、自己有用感を感じられると思う。大館市も10年前はそうではなかったということであるので、釧路市においてもまだまだ可能性がある。

(小出委員)

大館市ではすべての子ども達が家庭学習をやってくるとのことでそこも違いであると思う。中学生になると親の配慮も少なくなってくることもあり、家庭の働きかけが重要かと思うがどうか。

(池指導主事)

秋田県では、何十年も前から小学校1年生から毎日家庭学習をやるのは当たり前だと伺った。中学校の先生が家庭学習の指導をする必要はなく、その内容について多少の働きかけはあるものの、なぜ家庭学習をしないといけないのかという議論はない。秋田県ではどの学校でも見開き2ページ以上をやるのが当たり前となっており、継続的に学びを繋いでいくことが土台となっていると感じた。

(小出委員)

長男が中学生だった時と現在次男の通う中学校の先生の対応や雰囲気というものは良い方に変わっていていると思っている。これまでの小中連携に対する取り組みの成果が少しずつ表れているのではないかと感じる。

(岡部教育長)

総じて言えるのは、大館市の教育方針が先生達、子ども達一人ひとり、加えて地域にもしっかりと浸透しているのがよく分かる。子ども達も自分たちのキャリアを早い時期から意識しており、大館市の普通科高校は定員割れしているが実業系の高校はかなりの倍率なのだそうである。これは、申し上げた通り早い段階で自分達の将来について色々悩み、勉強が必要だということに至ったというということがよく分かり、大変参考になったという言葉以上の刺激を受けて帰ってきた。

【公開案件】 報告事項

## (2) G I G Aスクール構想実現に係る校内研修の実施について

(富田総括指導主事)

令和2年10月28日(水)の阿寒湖小学校を皮切りに、各校の行事や指導主事の学校訪問の合間をぬって、計画・実施しているところである。

今回の研修は、端末がない中ではあるが、学校にあるパソコンを使用して、全教職員を対象に1時間弱のプログラムを全校で実施している。今回導入されるchromebookの特徴や仕様等について説明した後、あわせて導入予定のドリルや学習支援ソフト「ロイロノート」について体験していただいている。

なぜ全教職員かということ、端末が導入された時どう使うかイメージしていただきたいと考えている。市教委から使い方を示すのではなく、担当の教科でどのように使えるか、教育活動にどのように使っていくかを考えてもらうのが一番の目的である。

12月の定例教育委員会では、教育委員の皆様にも、導入される学習支援ソフト等について体験していただけるよう準備していく。

今後、端末が入れば第2弾の研修も計画していく。

◎特に意見は、なし。

### 【公開案件】報告事項

#### (3) ネーミングライツの募集結果について

(工藤生涯学習部次長)

釧路市民球場及び釧路市民附属球場のネーミングライツスポンサーの募集結果についてご報告する。

令和2年10月5日(月)から10月23日(金)の期間で公募を行った結果、株式会社ウィンドヒル1者から応募があった。

施設の愛称については、「ウィンドヒルひがし北海道スタジアム」とするものであり、ネーミングライツ料は税別で年額400万円、契約希望期間は、令和3年4月1日から令和6年3月31日までの3年間で提案があった。

この応募を受け、令和2年11月11日(水)の選定委員会で審査した結果、同社を優先交渉権者として決定したものである。

ネーミングライツ料につきましては、施設がより一層充実するよう備品の購入や維持管理等に役立てさせていただく。

◎特に意見は、なし。

### 【公開案件】報告事項

#### (4) 学校の現状について

(大山教育指導参事)

校長会議において冒頭に、コロナ感染症の件で、現状では「首の皮一枚」の状況で、いつ児童生徒に陽性者が出てもおかしくない状況ありで、再度、保護者がPCR検査を受ける時には、支援課に連絡するようにお願いした。

次に、日本製紙の件で、正社員のお子さん以外にも、下請け、孫請け、関連企業への影響が心配され、各学校で関連する保護者から進学などの相談があると思うので、心のケアと同じく丁寧な対応をお願いした。

本題では、秋田県大館市の視察を終え、今後の対応について、私からは中学校の授業レベルの違いを簡単に説明し、授業改善が急務であること、教職員の資質能力の向上への挑戦になるので、校内でハレーションが起こる可能性が高くなるので、校長先生方には覚悟して対応するようお願いした。

また、視察には岡部教育長も参加し、高橋教育長とのお話の中で、来年度の教育講演会の講師をはじめ、釧路市の研修講座に大館市の先生方に講師として参加していただくなど、これからもご指導をいただくことも了解していただいた。

この視察を受け、教職員の資質能力の向上の第一歩として、釧路市小中学校に勤務する初任段階教員の授業力を向上事業、教員用マネジメントプログラムの試行を実施することとした。

次に、働き方改革と教育公務員特例法についてである。道教委が「働き方改革」に前のめりになっているので、教員の本来業務と「研究と修養」について確認する必要があると判断した。例えば、教育講演会に参加する教員が以前に比べて少ないなど、休日や時間外の研修会に参加して勉強しようとする教員の数が減っている現実があり、改めてお話をさせていただいた。

次に、先ほどの「教員用マネジメントプログラム」の研修の参加について、兵庫教育大学が全国の教育研究所等の関係者を集めて作成した研修プログラムで、試行的に実施して情報を収集するための研修です。このプログラム作成に関わった道立教育研究所の鈴木所長から直接お話があったので引き受けた。対象がミドルリーダーであるため、木曜会の会員に参加をお願いしている。

続いて、小学校の通知表について、従来のまま3学期制で通知表の発行を2回に減らす学校が多くなりそうなので、市教委としての考え方を示した。

釧路市においては学力が大きな課題であり、児童や保護者に学習状況を伝える機会を減らすことの影響は大きいことから年3回発行が望ましいと考えていること、教員自ら短いサイクルで指導を振り返り改善を図ることが必要であること、通知表作成は教員の本来業務であり「働き方改革」に当てはまらないことの3点をお願いした。

このことについては、小学校長会で学力の課題として「望ましい通知表のあり方」について話し合うようお願いした。

続いて、学校における押印とデジタル化の可能性について、国の方針で文科省から通知があったが、道教委からはそのままの通知文が送られたので、市教委としての対応と学校としての対応に分けて説明した。

次に、「釧路市立小中学校に勤務する初任段階教員の授業力向上事業」について、大館市の視察から、教員の授業力の向上が必須であることが改めて確認できたことから、まずは、初任段階教員を対象に質の高い授業を提供する事業を計画した。特に今年度はコロナの影響で公開研究会が開かれず、授業を参観する機会がなくなったのでオンデマンドにより授業提供をするものである。提供する授業は、指導主事が認めた学力向上セミナーによる授業、授業改善チームによる授業、教育研究センターの専門員会による授業で、希望する教員にQRコードを送付し、オンデマンドで授業を視聴することになる。

また、他にも指導主事による授業参観など授業力向上の取組を進めたいと考えている。来年度からは、大館市の「授業マイスター制度」を参考にすべての教員を対象に質の高い授業を提供できるシステムを構築していきたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

働き方改革と教育課題に対する先生方の頑張りについて整理が必要だと感じた。今まで学校現場はブラックで、働き方改革によって仕事が楽になると短絡的な捉え方をする先生や団体があるかもしれない。確かに無駄な事はそぎ落とし、本来業務に集中できるよう周りの人的支援等が必要であるが、教員であり続けるための意識やスキルのための努力も必要である。学校現場、一人ひとりの先生、団体に対して丁寧で適切な説明、調整が必要かと思うのでよろしく願います。